

特集

将棋盤

日本一の産地が紡ぐストーリー



世は将棋ブームに沸いています。神栖市と将棋には、切っても切れない縁があるのをご存知ですか？ 神栖市は日本一の将棋盤の産地であり、漁業のまちとして歩んだ歴史とも深く関わっているのです。今回は、将棋盤「へぐり」の物語に迫ります。

はまぐりの碁石と船大工

ここ数年の将棋人気の火付け役と言えば、史上最年少でプロ棋士となった藤井聡太二冠。その快進撃により、将棋ファンの裾野が広がっています。

将棋に欠かせないものといえば、将棋盤。実は神栖市が、将棋盤の生産量日本一であることは地元でもあまり知られていません。いったいなぜ、将棋盤づくりが始まったのでしょうか。

波崎地域では鹿島灘特産のはまぐりの殻で碁石が作られ、昭和20年代後半から最盛期を迎えました。しかし良質な材料が手に入りにくくなり、やがて衰退していきます。一方、漁



①碁石の原料となったのはまぐりが採れる鹿島灘
②網船の新造祝い(明治)。多くの船大工が働いていた
③醤油工場が多くあり樽づくりが盛んだった
④木を扱う技術は碁盤・将棋盤づくりに受け継がれた

業や舟運が盛んで多くの船大工や樽職人が働いていましたが、時代とともに木造船は減り、醤油樽はプラスチック製に代わって行きました。そうした時代の変わり目が重なり、船大工や樽職人が木を扱う技術を生かして碁盤・将棋盤づくりに転身。産地が形成されていきました。

手頃な卓上盤で将棋を普及したい

それではなぜ、生産量が日本一にまでなったのでしょうか？ かつて波崎地域には碁盤・将棋盤の製造業者が5社ほどありましたが、いまも製造を続けているのは1社のみ。その茨城木工(株)が、なんと全国シェアの8割を占めています。代表取締役社長の泉謙二郎さんに、日本一への

道のりを聞きました。

「いまから40年以上前に、一つの転機がありました。取引先の社長と、これから先、脚付きの高級盤に特化するか手軽に買える普及品を主力とするか議論し、私は迷わず普及品でいこうと決めました。まずは愛好者を増やすため、私たちが種まきをしていこうと考えました。その後、生活スタイルの変化で畳の部屋や縁側が少なくなり、テーブルに乗せる卓上盤やコンパクトな折り盤が人気となりました」

マス目を印刷し大量生産を実現

結果として、普及品に舵を切ったことは成功でした。しかしそれだけで日本一となったわけではありません

ん。普及品は

利益率が低い
ため、従来の
手作業に頼った
製法では行き詰まるのは
目に見えています。そこで泉さんに
妙手が浮かびます。それは、目を盛
る(マス目を引く)工程を手作業から
印刷へと変えることです。



泉謙二郎社長

「手作業では1日に1人100枚が限度で、線にもばらつきが出ます。なんとか盛り上がったマス目を印刷できないか探したところ、電気回路の印刷技術が応用できると分かりました。すぐに装置を導入し、大量生産が実現したわけです」

情報収集と試行錯誤を繰り返し、インク(人工漆)の調整にも苦労するなど、印刷という製法の確立までには丸2年の歳月を費やしました。

伝統に時代の風を取り込む

さらに、もう一つの壁が立ちました。当時は将棋盤といえば伝統工芸品という感覚が強く、機械化はまさに常識外。しばらくは問屋で取り扱ってもらえませんでした。

「私は、伝承と伝統の2つがある